

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 阿部 新 印

学位申請者 劉鑫（リュウキン）

論文名 日本語を第二言語とする学習者の「自己像」形成におけるモチベーションの変容－L2 Motivational Self Systemモデルの観点から－

【審査の結果】

審査委員会は阿部新教授を主査とし、本学の海野多枝教授（主任指導教員）、吉富朝子教授、林俊成教授、谷口龍子氏（本学国際日本研究センター特任研究員）の5名で構成された。最終試験は2025年2月17日（月）に行われ、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するのに相応しいものであるとの結論に達した。

【論文の概要】

本論文のねらいは、生涯にわたる長期的なスパンにおける日本語学習のモチベーションの変容を、学習者の言語（日本語）自己像の変容との関連において明らかにすること、また、この視点から従来の言語自己像に基づく動機づけ理論(L2 Motivational Self Systemモデル)に新たな理論的提案をすることにある。従来の第二言語（日本語）学習モチベーション研究は、教育機関で学習中の学習者や留学中の留学生に焦点を当てるものが大半を占めてきた。しかしながら、教室外学習における広義の日本語学習は、学習者が教育機関に所属する以前から始まり、教育機関を修了した後も、あるいは留学生活を終えた後も、いわば生涯にわたって継続しているのが実情である。留学生活を終えて社会人になった後も、日本語の使用者（ユーザー）として日本語を学び続ける彼らは、いかにして動機づけを維持しているのか。また、彼らは日本語使用者として生きる中でどのような言語（日本語）自己像を構築していくのか。以上の問題意識から、本研究では以下の三つの研究設問が設定されている。

- (1) 日本語を学びながら人生を歩む中で、留学生の「言語（日本語）自己像」はどのように変化していくか。
- (2) 日本語を学びながら人生を歩む中で、留学生の日本語学習モチベーションはどう変化していくか。

- (3) 「言語（日本語）自己像」の変化と留学生の第二言語学習モチベーションの変化はどのように関連しているか。

以上の問題に取り組むにあたり、本研究では日本に留学して高等教育を受け、その後も日本語を使用するキャリアに進んだ中国出身の元留学生 4 名の学習経験に焦点を当て、ライフストーリー・インタビュー調査法を通じて質的分析を行った。データ収集は最長 5 年間にわたる協力者との関わりの中で、各協力者ごとに計 5 回～7 回のインタビューを通じて行われた。質的データ解析ツール MAXQDA を用い、①ライフストーリーに出現した重要な出来事のカテゴリー生成とコーディング、②出来事に関連する言語（日本語）自己像のコーディングを行った上で、これらを時系列的に配列し、学習者にとって重要となる変化の軸を基に時期区分を構成し、言語（日本語）自己像の種類や変化を記述した。この際、独自の構成概念である「保持 L2 自己」を加えた新 L2MSS モデルの枠組みを用いている。学習者ごとに詳細な分析を加えた後に、4 名全体の分析結果を比較検討し、共通する傾向、異なるパターンを見出し、理論的考察を加えている。最後に本研究の結果を踏まえて総合的考察を行うとともに、教育実践への提言と今後の課題に触れている。

本研究は全 6 章からなる。各章の要点は以下のとおりである。

第 1 章では、まず上記の目的を立てた背景や問題意識を述べた後、本研究の分析において重要概念となる「言語自己像」を定義している。その上で、本研究の目的と研究設問を示し、研究全体の構成図を提示している。

第 2 章では、まず心理学及び第二言語習得分野におけるモチベーションの概念化の五つのアプローチを整理して論じている。その上で、日本語教育学におけるモチベーションの先行研究を、量的・質的研究に分けて概観している。また、本研究の枠組みである「L2 Motivational Self System (L2MSS)」モデルによる研究を取り上げ、特に中国人学習者に焦点を当てた先行研究の問題点を指摘した後に、本研究の視点を提示している。そこでは、学習者を単に学習する者としてでなく、全人格を持ち人生を歩む一個人として扱い、生涯にわたる長いスパンから、彼らのアイデンティティの発達に注目しつつ、日本語学習モチベーションの変化を捉え、両者の関係について探ることを目的として、以下の三点に基づき本研究を設計することが述べられている。①言語学習者自身の視点で構築される「言語自己像」という概念を使用して日本語学習者のアイデンティティの発達を理解する。②日本語学習者の「言語（日本語）自己像」及びその変化を個人の人生の歩みにおける文化・社会的な文脈で捉えるために、研究方法としてライフストーリー研究法を使用する。③日本語学習者の「言語（日本語）自己像」に合わせて、モチベーションを捉える理論的枠組みとして、「自己像」の概念を含む L2 Motivational Self System モデルを使用する。

第 3 章では、本研究の理論的枠組みである L2 Motivational Self System (L2MSS) モデルと、これに劉氏が加えた修正について詳細に論じている。Dörnyei が提唱した L2MSS モデ

ルには、「理想 L2 自己(ideal L2 self)」「義務 L2 自己(ought-to L2 self)」「L2 学習経験 (L2 learning experiences)」の三つの構成要素がある。このモデルは、もともと Higgins(1987)が提唱した「可能自己」の概念と「自己不一致理論」に基づいて、Dörnyei が第二言語習得分野で捉え直したものであり、自己不一致理論には未来志向性という特徴があるため、L2MSS モデルも未来志向性の特徴をもつ。しかし、本研究の研究協力者のように生涯にわたり学習を続ける学習者の場合、未来志向性のモチベーションのみでは捉えきれない現象が見られた。このため劉氏は、過去志向である「過去自己」の概念と「自己一貫性理論」を提唱し、Dörnyei のモデルに「保持 L2 自己」という新たな構成要素を加えることを提案している。そして、Dörnyei が提唱した「理想 L2 自己」「義務 L2 自己」「L2 学習経験」に、本研究で提案する「保持 L2 自己」、さらに Buasasengtham・義永が提唱する「L2 社会的要因」を加え、これら五つの概念を含む新たな L2MSS モデルの枠組みを提案し、本研究で使用するとしている。

第 4 章では、調査方法及び分析方法について論じている。データ収集はライフストーリー・インタビューを用いた。研究協力者は 4 名の社会人の中国人日本語学習者であり、いずれも日本への留学経験を持ち、留学終了後も日本語を使いながら仕事に従事している。幼少期から社会人になるまでの日本・日本語・日本語学習に関する出来事を自由に語ってもらい、フォロアップインタビューも含めて、最大 5 年をかけて、縦断的に調査した。データ分析方法は以下の通りである。質的データ解析ツール MAXQDA を用い、まずはインタビュートランスクリプトデータを脱文脈化し、①ライフストーリーに出現した重要な出来事のカテゴリー生成とコーディング、②出来事に関連する言語（日本語）自己像のコーディングを行い、その上で、時系列にそって再文脈化し、ライフストーリーとして再構成するという手法を用いる。研究設問(1)の「留学生の「言語（日本語）自己像」の変化」については、ライフストーリーの区分に沿った言語（日本語）自己像の変化を分析する。研究設問(2)の「留学生のモチベーションの変化」については、L2MSS モデルの 5 つの構成要素（理想 L2 自己、義務 L2 自己、保持 L2 自己、L2 学習経験、L2 社会的要因）を用いて分析し、ライフストーリーの時期区分ごとに変化を記述する。研究設問(3)「「言語（日本語）自己像」の変化と留学生の第二言語学習モチベーションの変化の関連」については、研究設問(1)と(2)の結果に基づいて考察する。

第 5 章では、5.1 節から 5.4 節にかけて、4 名の中国人学習者のデータ分析結果と考察を詳細に提示し、5.5 節では三つの研究設問に答える形で結果をまとめて考察している。研究設問(1)で挙げた、学習者の生涯における「言語（日本語）自己像」の変化については、4 名の日本語学習者の「言語（日本語）自己像」の変遷に共通する 7 つの段階を見いだした。学習者はいずれも、幼少時の文化的な興味から始まり、学習を通じて専門的な能力の獲得へと発展し、最終的には社会的な統合と自立へと至る。この過程で学習者は、日本語を単なるコミュニケーションの手段としてでなく、自己実現と社会貢献のための重要なツ

ールとして位置付けるようになる。この変化の過程は、言語学習が個人のアイデンティティの発達にも深く影響していることを示すものでもある。研究設問(2)で挙げた、学習者の生涯における日本語学習のモチベーションの変化については、4名の日本語学習者のモチベーションの変化のし方に一定のパターンがあること、またそのパターンは当初の目標設定と最終的な目標達成状況によって異なることを見出している。まず第一のパターンは、当初から日本語に興味を抱き、最終的に日本語と関連のある職に就くことを目標として歩んできた学習者の場合である。最終的にその目標が達成できた学習者は、描いてきた理想 L2 自己が達成され、義務 L2 自己という要素が消滅するという理想的な軌跡を辿る。しかし、もしその目標が達成されず、日本語と関連する職に就けなかった場合は、保持 L2 自己という要素だけが残ることになり、モチベーションが最も消極的な状態になる。第二のパターンは、当初は日本語学習を目標としていなかった学習者が、義務的に日本語を学び、最終的に日本語と関連する職に就いた場合である。この種類の学習者は、モチベーションを支えるのに、理想 L2 自己、義務 L2 自己、保持 L2 自己、L2 社会的要因、L2 学習経験という多種類の要素を必要とすることになる。しかし、いずれの場合でも、生涯という長期的なスパンで見た場合には、理想 L2 自己や義務 L2 自己の姿勢で常にモチベーションが維持されるわけではなく、最終的な言語（日本語）自己像は保持 L2 自己の方向へ収束していく傾向があることも見出された。研究設問(3)で挙げた、「言語（日本語）自己像」の変化と第二言語学習モチベーションの変化の関連については、日本語学習者の日本語学習モチベーションは彼らの言語（日本語）自己像と深く関連して変化していくことが明らかになった。

第6章では、本研究で得られた知見をまとめて結論として提示した上で、以下の三つの観点から本研究の第二言語習得論における意義を掘り下げて論じている。

第一に、概念的枠組みとして、「言語自己像」という新たな概念を使用して全人格的な視点からモチベーションの理解を試みた点に意義が見出せる。従来の第二言語（日本語）モチベーション研究は教室場面を中心とするものが多く、モチベーションを学習の成否に影響する変数の一つと見なす傾向にあった。しかし、近年では、学習を単なる知識の伝達過程でなく、学習者のアイデンティティを含む全人格の発達過程と見なす教育観への移行に伴い、モチベーションも学習者の全人格的な成長過程で捉える視点が求められている。本研究は、「言語自己像」という概念を援用することで、全人格的な発達の視点でモチベーションを捉え、学習者中心の教育と学習者オートノミーの観点から提供しうる支援を模索するという新たな切り口を示している。

第二に、理論的枠組みとして、未来志向型の従来の L2MSS モデルに対して、過去志向による「自己一貫性理論」の提案とそれに基づく「保持 L2 自己」という構成要素を新しく追加した新 L2MSS モデルを提案している点である。本研究の協力者のように生涯にわたる長いスパンで学習を継続する場合、学習者の言語能力が各自のニーズを満たすのに十分な一

定程度の水準に達したとき、「理想 L2 自己」、「義務 L2 自己」のように強い目的性は消滅し、現状維持への欲求が生じる。本研究では、この現象における現状維持の自己像を「消極的な理想 L2 自己」と捉え、「保持 L2 自己」の概念を提案する。本研究の結果は、人生のスパンで見た時に、人は未来だけでなく過去の自己とのアイデンティティーの一貫性を維持する欲求があることも示している。言語自己像の枠組みに「保持 L2 自己」を加えることは、モチベーションという複雑な概念を、よりダイナミックな視点から再概念化・再理論化するという Ushioda の提案する方向性に合致するものである。

第三に、方法論的な観点から、分析方法としてライフストーリーの質的分析手法を用いて、具体的な語りを提示しながら、分析の過程を詳細に記述したことである。

以上の研究意義を提示した後に、三つの研究設問の結論を基に、教育機関における留学生に対する教育支援と、教育現場に対する今後の研究課題を示し、それぞれに三つの提言と五つの今後の研究課題を述べることで、これからの研究発展の方向性を示している。

参考文献：説明略

資料：説明略

【講評】

本論文で特に高く評価されたのは主に以下の点である。

- ① 最長 5 年間という長期間にわたり、膨大な量のライフストーリーインタビューデータを収集し、協力者との深い関わりの中で、協力者の人生全般にわたる学習史に対する深い洞察に基づいた考察を行っている。
- ② 日本語学習モチベーションを、学習者が教育機関に属する期間に留まらず、幼少期から留学を経て就職に至るまでの全人格的な観点で捉えている。
- ③ 従来英語学習者が主な対象であった L2MSS モデルを基に、言語（日本語）自己像という新たな切り口から、日本語学習者のモチベーションを捉えるとともに、L2MSS モデルの有効性を検証している。
- ④ L2MSS モデルの構成概念を丁寧に吟味し、自身のデータ分析から「保持 L2 自己」という新たな構成概念を提案し、L2MSS モデルに対して理論的な考察を加えている。
- ⑤ 構成概念の定義や従来の概念との違いを表にするなどして明確な形で提示している。

一方、審査委員からは、以下の課題も指摘された。

- ① 本研究の結果として、協力者全員に共通する 7 つの発達段階が提示されているが、共通した段階が得られたのはサンプルの同質性によると解釈できる部分もあり、もう少し異質なサンプルを含めることでより汎用性のある段階を見出せた可能性があったのではないか。
- ② 「保持 L2 自己」という構成概念は、本研究データを分析する中で新たに生成された概

念であるにも関わらず、L2MSS モデルの理論的考察の中で提案されたものであるかのような書き方になっている部分がある。この点をもう少し明確に記せばよかった。

- ③ 「保持 L2 自己」という独自の概念を提案していることは評価できるが、現在の日本語力を維持するというのは未来志向的であるとの捉え方も可能であり、「理想 L2 自己」と別概念と捉えるかどうかはいまだ議論の余地があるのではないか。
- ④ 6 章の総合考察の部分で新たに追加された分析視点があるが、これは本来はもう少し本論の中に組み込まれるべきではなかったか。
- ⑤ 本研究の結果は、モチベーションのプロセスアプローチといった既存の他の理論との共通点や相違点、学習者の主体的働きかけによるモチベーションの変化の可能性など、さらに考察可能な論点が含まれており、今後考察を深めていくことが期待される。
- ⑥ 記述は概して明確であるが、日本語の文章表現やデータ提示上の整合性においてやや不十分な点が見られたのが残念である。

こうした指摘は、もちろん劉氏の研究の新奇性とデータの稀少性を十二分に理解したうえで、さらに精緻な学術論文を目指す上でのアドバイスとして述べられたものであり、劉氏の論文に対する評価を些かも低めるものではない。最終審査での回答から、劉氏が意図する構想が十分な実証研究に裏付けられていることが確認できた。

【総合評価】

本研究は、長期にわたって形成された調査協力者との十分なラポールの上で、豊富なインタビューデータを分析していること、生涯にわたる長期的なスパンにおいて日本語学習モチベーションを分析するという新たな視点を採用したこと、「保持 L2 自己」という独自の構成概念を提案し、日本語学習のモチベーション研究への新たな切り口を盛り込んでいくことなどが、短所を補ってあまりある長所であると評価された。またデータ分析結果に基づく考察の部分においてはさらなる精査と改善が望まれることが指摘されたが、公開審査においては、申請者からの的確な洞察と解釈が示され、今後の研究に反映されることが期待された。また現在非常勤教員として勤務している大学においては、日本語教育を実践しており、教育現場に貢献しつつ、本研究のさらなる検証を目指している点も高く評価される。学位請求論文の内容、最終試験での応答をふまえ、審査委員は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するのに相応しいものであるとの結論に達した。